

滑稽雜談

午上

特別
~5
6326
9



滑稽雜談卷之九目錄

五月部上

- 初五月 異名
- 一 芒種節 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 二 夏至節
- 三 半夏生 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四 五月雨 零
- 五 五月園 梅雨
- 六 獻割刀 五月雨
- 七 獻草蒲 あやめ草
- 八 五日節會 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九 松中祭 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十 騎射 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十一 走馬 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十二 葛蒲酒 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十三 葛蒲根合 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十四 競渡 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十五 競馬 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十六 曾櫛 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十七 卯地 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十八 競渡 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 十九 競馬 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 二十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 廿九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 三十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 四十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 五十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 六十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 七十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 八十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十一 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十二 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十三 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十四 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十五 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十六 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十七 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十八 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 九十九 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖
- 一百 早此供 端午 舊曆 葉玉 長命鎖

廿五 室以種祭 日 今宮祭 廿六 室以種祭 廿七 室以種祭
 日 有之日 日 山田御田極 日 任衣御田極 廿八 大原片
 日 富士垢離 廿九 宿勝條 卅 賑給 日 無詠改
 卅一 神宮神樂 日 任衣御 卅二 分龍節 日 神宮神樂
 卅三 菅蒲枕 卅四 垢衣御祭



滑稽雜談卷之第九

五月之部

四時堂其諺編錄

○五月 異名 仲夏 ○月令曰仲夏之日 始月

易經 皋月尔雅 ○玉燭宝典曰五月為皋月亦曰暑月

日長至月令 蕤賓 ○前漢律曆志曰蕤賓者五月律

也蕤繼也賓導也言陽始導陰氣使繼養物也位於午在

五月 ○白虎通云蕤者下也賓者敬也言陽氣上極陰氣

始賓敬之也 日短至淮南子 鵲月 皇月

和名 早月 ○法補真儀抄云田々家々けりけりゆりま月と云

此乃也

早月 古今 五月五日 孰ら陽下地かのみおとすや 修勞

梅月 福玉 今月代り梅月の名をさすよ言はぬの如し人 亦屋

待月 澤月 いかして若のさすよとてゆゑを此の五月の如し 室家

月石 足月 日 五月五日 五月五日 五月五日 五月五日 五月五日 五月五日

吹簫月日 時常物名の後も吹簫月日ありては此の如きなり

按て月日 此の如きなり 此の如きなり 此の如きなり

田原月日 此の如きなり 此の如きなり 此の如きなり

○芒行節 ○素問馬玄臺注云仲夏芒種節初

五日蟪蛄生次五日鵙始鳴後五日反舌無聲○是月也

△蟪蛄生 ○月令曰仲夏之蟪蛄生○注曰蟪

蛄一名蜥父一名天馬言其飛捷如馬也○尔雅曰莫綱

蟪蛄不過螳螂也其子蜉蝣郭璞云江東呼為石蜉○時

珍本草曰蟪蛄兩臂如斧當輒不避故得當即之名俗呼

為刀蜉充人謂之拒斧又呼不過也代人謂之天馬因其

首如驢馬其子房名蟪蛄者其狀輕飄如絹也酉陽雜俎

謂之羊七螳螂驤首奮臂修頭大腹二手四足善緣而捷

以鬚代鼻喜食人髮能翳葉捕蟬深秋乳子作房粘着枝

上即蟪蛄也房長寸許大如拇指其內重々有隔房每房
有子如蛆卵至芒種節後一齋出故月令有云仲夏螳螂
生也○和唐不後のこし けさの葉とくくと 蟪蛄は俗に
七月の

△鵙始鳴 ○月令曰仲夏之月鵙始鳴○註曰

鵙博勞也○左傳曰伯勞以夏至來冬至去故曰伯趙氏

司至也○尔雅郭璞注曰鵙似鶉鶉而大○時珍本草曰

礼記五月鵙始鳴豳風七月鳴鵙之義不合八說八說注

不同如此要之當以郭說為準○考連詁同不不窮とて秋

とる勿論今又芒種の二候と記さる上乃二候ハ夏之候と記さる

淨福のいふやとるさきまを古人の考と集事書に記せり其

考も是なり也時云世の考も是なり也考も是なり也

考も是なり也考も是なり也考も是なり也考も是なり也

考も是なり也考も是なり也考も是なり也考も是なり也

△反舌無聲 ○月令曰仲夏之月反舌無聲○

註曰反舌百舌鳥凡物皆稟陰陽之氣而成質其陰類者
宜陰時陽類者宜陽時得時則興背時則廢疏又以反舌
為蝦蟇未知是否○陳藏器本草拾遺曰百舌一名反舌
今之鶯也○古詩詠書云鶯音入舌是也如鳥之乳也
今之鶯也○古詩詠書云鶯音入舌是也如鳥之乳也
今之鶯也○古詩詠書云鶯音入舌是也如鳥之乳也

○夏至

素問馬玄臺注云夏至氣初五日鹿
角解次五日蜩始鳴後五日半夏生木槿榮○漢禮儀志
曰夏至日浹井改水不病瘟疫○格物論云猫其鼻端常
冷夏至一日暖○是五月の中より一陰と生る候なり

△鹿角解

月令曰仲夏之月鹿角解○古詩詠
不說皆夏至也鹿角解之時也

事以物分初は麻角皆言去此頃後て初夏又角ありて
六月は是古也の志為所解也格物論云去此頃後て初夏又角ありて
六月は是古也の志為所解也格物論云去此頃後て初夏又角ありて
六月は是古也の志為所解也格物論云去此頃後て初夏又角ありて

△守夏生木槿榮

○月令曰仲夏之月半夏生
木槿榮○時珍本草曰半夏一名守田○又曰木槿此花朝開暮落
故名曰及日槿曰舜猶僅榮一瞬之義也○はあんの守夏

守夏生
守夏生
守夏生
守夏生
守夏生
守夏生
守夏生
守夏生
守夏生
守夏生

○守夏生

○簋簋內傳曰半夏生五月中十一
日可註之此日不行不淨不犯姪欲不食五辛酒肉日也

○或後言日ハ似母摩耶夫人の中陰の事申す所也
除くと謂ふ物附會此説ハ和漢日毒丸降るとして一切野菜類を
挿て會食は後遺等云々五辛と會食の謂ハ地氣あり一食の後
もね疾む日ハ新くも日見と陰之程陰陽此入する處なり

○入梅

○四時纂要曰閩人以立夏後逢庚日
為入梅芒種後逢壬日為出梅得雨乃宜耕耨○神樞曰
芒種後逢丙日為入梅小暑後逢末日為出梅○碎金錄
曰芒種後逢壬日為入梅夏至後逢庚日為出梅○李時
珍本草曰芒種後逢壬為入梅小暑後逢壬為出梅○考
入梅の說和漢の事ハ其の十幹より入日と云ふ事ハ
七日或ハ二七日と云ふ事ハ出梅と云ふ説ハ其の
と云ふ事ハ五月而逢壬日と入梅ハ是碎金錄之時也

△梅雨

○埤雅曰今江湖二浙四五月間梅欲
黃落則木潤土溽柱礎皆汚蒸鬱成雨謂之梅雨故自江
以南三月雨謂之迎梅五月雨謂之送梅○周處風土記
曰梅熟時雨謂之梅雨○夏文前集云夏至前雨為黃梅
雨沾衣服皆敗黧○小室通記ハ梅の雨より作はる云

△微雨

○字彙曰微音枚物中久雨而青黑也○五雜
俎曰閩人所謂入梅出梅者乃微濕之微非梅又云江南
三四月若霪雨不止百物微腐俗謂之梅雨蓋當梅子青
黃時也○時珍本草曰梅雨或作微雨言其沾衣及物皆
生黑黴○是之佳句也○和訓彙解云ついでに梅雨の
陽氣のりや五月一陰を多る故なりとの陽氣を是
陽氣のりや五月一陰を多る故なりとの陽氣を是
陽氣のりや五月一陰を多る故なりとの陽氣を是
也一説云万相ありて漢の氣之故也

○五月節

○尔雅曰五月雨謂之送梅 ○和州會解云ふ
たれらるるにその畧く五月めいぬに上畧めいぬにたれらるるの上畧
引出ぬに流毎足の始也云々 ○内會曰五月節一梅節一花二
句の節はさるるに五月節一花二句の節はさるるに今一花
卯は梅の節に梅節と云ふに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに

△陸奥花文

○是れ五月の節にさるるに今一花二句の節はさるるに
○梅河の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
○陸奥の花文はさるるに今一花二句の節はさるるに
○陸奥の花文はさるるに今一花二句の節はさるるに
○陸奥の花文はさるるに今一花二句の節はさるるに
○陸奥の花文はさるるに今一花二句の節はさるるに
○陸奥の花文はさるるに今一花二句の節はさるるに
○陸奥の花文はさるるに今一花二句の節はさるるに

陸奥の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに
今一花二句の節はさるるに今一花二句の節はさるるに

△梅雨穴

○雍州府志曰梅雨穴在烏丸正親町南西
禁門之傍每梅雨節此処水涌家井此節多油此水純清
梅雨晴則此水亦涸一説云桓武天皇遷都之日傳教大
師有此處干奮井誦咒封之 ○今もあつて後のよ

△虎の海雨

○世傳五月廿八日は虎と虎は紅毛の海
の在る虎の事也傳云建之四年夏五月高松村に旱干して牧
牛を飼ふ者も畜畜成其時宗親の歌之痛恨を討つるも
其の由縁もいとよく傳はるるに

眼穿りて括履中筋よ入て討きて死にけり月廿八日之虎内あり脚筋は深
く穿りし人其刺を越して海の時と云ふは好まきなれども附會の後を
知る是と信れ一月の中黒月の陰見せしむるあり其之に思ひ入りし
あり其時黒月の事あり其時九日なりと云ふこと此の物と云ふ所し
依りて信れ今此のし海乃又と云ふと推して事を用ひし中事
し其まの妃御女矣帝の別を志し湘浦の竹を際て海痕跡と云り
楊妃の涙は凍りて紅水と云ふは況むいふ事なり

△濯枝雨 ○周處凡土記曰仲夏濯枝盪川○註云此
節常有大雨名濯枝○是も昔月毎の雨や云々

△黃雀風 同日仲夏長凡扇暑○註云此節東南常
有風俗名黃雀長風○初学記曰五月為黃雀凡是時海
鳥變為黃雀回以名之○是和信云竹のよろし吹るころのや

○五月周 ○其事小菴中集月人五月の月の事あり

○献割凡刀一日 ○延喜式納匝云割凡刀廿枚又
長五寸毎年五月一日七月一日兩度盛揚管一合進之
其管用料内料堅鐵大六斤四兩膠小十二兩木賊小
八兩伊豫砥二顆檜小半村料韮紙十張敷刀子和炭三斛
單切七十五人上七十八人 夫五人 ○是より内後ゆり神凡と執り

時用たりあり凡刀を執り中より今世は候也なり

○聖君足揃一日 ○是清和聖帝の社より五り十者此競り侍
け競り二十疋此馬乃是と讀してつと云ふ神人其は勝たしし五日の競り
御人何れ一匹よりと神人打馬帽子中又西は杉の下の御人多衣と云ふてのりあり何れも

常直り競り好むは馬ありは其内四月代より於志能流等流御
流は此衣と云ふ競り流精を多くた人侍を競馬馬を競て人を競りの
ありはこれより人馬はとも馬を競ひ流はさふあり侍も此
馬の是と稱して進退を減りありん事なり

○松中祭 一日
 ○是江初松中祭の事平師為所傳の祭礼なり
 神祇活の年時此祭は四月に於て法皇の十一年御社より行幸ありし事
 此より後御書に記さるる古事五月に於て此祭を御社に中人有る
 衆多ありしに世月程極難なり一述事は月一日よりなり也

○聖武天皇 二日

○統日本紀曰天聖回押開豐櫻彦
 天皇勝宝感神天之真宗豐祖父天皇故之皇子也母曰
 藤原夫人贈太政大臣不比等之女也和銅七年六月立
 為皇太子神龜元年二月甲午受禪即位於大極殿天平
 勝宝八年五月乙卯崩於寢殿同壬申奉葬於佐保山陵
 御葬之儀如奉佛供具有師子座香 天子座金輪幢大
 小室幢花縵蓋繖之類在路令留人奏行道之曲是日
 勅曰 太上天皇出家歸仏更不奉謚注云至聖字二年
謚豐櫻彦天皇

○元亨尺昏曰聖武皇帝饗國二十五年流王沢崇仏乘
 異城聖賢郷凡來應凡百勝業見資治表天平二十一年
 就行基法師受菩薩戒七月三日禪位太子年五十出家
 修道法諱勝滿云○延喜式諸陵曰聖武天皇陵在大和
 國佐保山南院添上郡○大和別記曰添上郡佐保の眉岡に
 有る天皇の御廟是也此前佐保川邊佐保にありて寺に有る天皇の廟は
 今世行毎に五月二日御忌を以て大和に於て同儀しむる也

○獻菖蒲 三日

○和漢合運曰仁德天皇三十九年
 辛亥五月始詔獻菖蒲○統日本紀曰聖武天皇天平十
 九年五月朔子庚辰○天皇御南苑親騎射走馬是日
 太上天皇詔曰昔者五日之節常用菖蒲為縵此來已停
 此事從今而後非菖蒲縵者勿入宮中○延喜式左近云
 凡五月五日葉玉料菖蒲艾一摠盛雜花十捧盛居盛三日平

且内侍司列設南殿前謂府○公事根源曰五月三日六府
當蒲乃連とある殿の階は東西よりみ付りて北より東へ天
平十九年より任りて百官諸人等々あやゆみの警をさへりし
ひきの官中へ入るるは定られた

△當蒲菅四日

○拾芥抄曰五月四日主殿寮葺内

裏殿舎菅蒲○公事根源曰四日、船舫の底よきとて川に
引くまゝぬつて○葺きおき葺き方、小一條の九倉師等此種
渡定時の子たち中ねそのゆりて舟へ引しと一條流出時大綱を
流の事よりして陸奥の邊せりてそのあやゆみ月五日あやゆ
ふりしは流の所はわたりてとて葺き方は葺き中葺き
葺き流とあり○南無國信をせりて當蒲文を葺き其の
今もまゝ流とありしなり

考集七 流は葺きおきぬつてあやゆみ葺き方は葺き中葺き
葺き流とありしなり

○五日郎余

○日本紀曰推古天皇十九年夏

五月五日葉獵於兔田野取雞鳴時集于藤原池上以會
明乃往之粟田細目臣為前部領額田部比羅夫連為後
部領○先代舊事紀五十日端午日天皇推命司祇頭奈
媛於大己貴大神荒魂午頭天皇奉天牟地類獻天皇給
群臣造五色餅以黃為心青赤白黑為端以茅葉包之以
五色絲結之○統日本紀曰文武天皇大室元年五月癸
酉朔丁丑令群臣五位已上出走馬中天皇臨觀焉○同云
聖武天皇神龜四年五月壬申朔丙子天皇御南野榭觀
飭騎々射○同天平元年五月甲午天皇御松林苑宴王
臣五位已上賜祿有差亦奉騎人等不問位品給錢一千
文父同七年五月庚申天皇御北松林覽騎射入唐迴使
及唐人奏唐國新羅樂持槍五位已上賜祿有差○延中
式改曰五月五日天皇親騎射并走馬并及史等檢校

諸事所司各設御座於武德殿○公事根源曰六日の節會の
天皇御座御座の御座なりて宮會とてはむは難屋小河を流るり肉
赤なるも空御元日七日よりくくく此あやのれくくく日産の優
のくくく由業あやの流河業とてなるの系類長を事とてなるのみと
乃に流とてしむらふわくもいゝ五鬼とてくくくや下かみ侍くくく
騎射の事ありて將射の此事とてくくくなるを馬とてあてりといふ
是といひまゆくくくく推古天皇の御座りける今後てい代り

端午

三輪大神遂入天皇夢告吾和魂神午頭太神從往昔悉
宰大地任貧富病殃世間疫鬼等皆此神從徒午月端午
能定其役以五色餅各包茅葉以五色線各結五處以雙
木瓶盛辛其酒口馬雙頭副之埋土以誠精方祭此神者
行疫兵乱乍止五穀重穗大登遂如教行之果如告治平

○先代舊事紀二十日瑞籬宮神朝時禘

○同八卷十日端午日天皇推命司祇頭祭於大己貴大
神荒魂牛頭天皇奉天牟地類獻天皇給群臣造五色餅
以黃為心青赤白黑為端以茅葉包之以五色絲結之○
凡土記云端午注端始也○韻會日午說文今悟也五月
陰氣午逆陽冒地而出也此与矢同意徐曰人為陽一為
地一為陰氣貫地午逆陽也五月陽極陰生忤者正衝之
也午亦象衝逆也廣韻交也上已拾言記曰端午之午字非
也○歲時記曰京師人以一日為端一二日端二三日端
三四日端四五日端五○五雜俎云張九齡上大衍曆序
曰謹以開元十六年八月端午獻之又宋璟表日月惟仲
秋日在端午然則凡每月五日皆可稱端午○珊瑚鈞詩
話曰端午之號同重九後世以五字為午則誤矣○乃後晉書云端午之號同重九後世以五字為午則誤矣

やうに人より初より末まで玉の玉にありあり南せよ申内の子五日
今上集られたる御月日宜し御口の御に玉を玉にありあり申内の子五日
乃命す系御より系御を考り或は病を病にありあり申内の子五日
只如く存し是又毒玉の遺風に申し申内の子五日

万葉集 上巻 新撰言記 霍公鳥鳴五月者昔言蒲花揚乎玉不貫草草将爲命 野山石玉
長命縷 ○風俗通曰五月五日以五絲絲繫辟兵令人
人不病瘟一名長命縷一名辟兵縷一名五色縷一名絲

索 ○提要錄曰五月五日絲絲結合歡索纏臂辟邪
辟兵符 ○抱朴子曰或問辟五兵之道曰五月五日
着赤兵符於心前今叙頭符是也 ○

騎射五日 ○延喜式 馬寮 曰右當日早朝鞍筒定
馬授二府近右衛門騎射官人率舍人到來裝束居駕幸武德
殿左右各以奏文附御監 一寮奏載射手官人以下官姓
右隔年 互奏 其後騎馬在前諸衛射人皆以次列向於馬場御
馬渡畢右五位以上官一人在後而行其所須裝束料物

足別結額髮料緋糸大二分四銖韁鞆料調布四尺二寸
表腹帶料七尺馬并舍人名札二枚袋料緋油絹二丈裏
絹等經奏請之 ○同缺部 曰五月五日騎射前月左右近
衛左右兵衛等府各試練應射人造簿移省射畢即錄中
的人數申官每中一的給布一端 ○同寮式 曰五月五日
省寮率學人候又競馬標料戈二竿立第三的南十丈六
日亦同 ○同兵衛 曰凡五月五日騎射官人二人皂緋深
綠帑布衫 布佐着緋 金畫細布甲形金畫曹形白布帶橫刀
弓箭行騰麻鞋兵衛十人皂緋緋大纈布衫 其頭二人丹
紫大纈 畫細布甲形曹形白布帶橫刀弓箭行騰麻鞋 ○

走馬 五日 ○延喜式 缺部 曰五月五日五位已上
進走馬親王一品 八二品 六三品 四品 略 四 大政大臣 八左
右大臣 六 大納言 四 中納言 三 三四位 參議 二 一二位 三

籩のこし今和信の製きおむ、籩糕之菱糕、菱米のこし、筒糕、行の筒の形、移糕、移の權のこし、丸糕、團子とのり、ぬぐ、百子糕、珠糕のこし、おむ、こし、黄より、羅山子、法、わ、ホキ、よ、ぬ、や、糕、頭と、捏らして、合ふ、鬼を、法、依、ま、ま、と、作、り、苦、い、あ、そ、り、り、こ、は、法、依、お、は、り、

人の作り、り、り、糕、と、お、こ、を、で、ア、ン、ン、野、を、と、ら、り、
た、か、お、お、の、り、ま、れ、を、と、れ、て、ま、り、苗、う、れ、り、ふ、ら、ぬ、あ、い、の、こ、ま、ち、の、ま、ち、ま、
搥き た、か、お、お、の、り、ま、れ、を、と、れ、て、ま、り、苗、う、れ、り、ふ、ら、ぬ、あ、い、の、こ、ま、ち、の、ま、ち、ま、
こ、あ、い、ら、ぬ、ほ、ろ、こ、の、り、は、い、ち、み、け、は、荒、ち、ま、の、め、い、つ、つ、ま、ま、ま、
乃、徳、母

○菖蒲酒 歲時記曰端午以菖蒲或縷或屑

酒泛之○曜仙神隱書云端午日以菖蒲服酒尤妙○章

筒公詩云菖蒲泛酒充樽綠○年余搥碎、五月菖蒲酒、酒、

入、て、飲、ゆ、も、ま、ま、徳、母、別、り、り、あ、い、の、は、い、の、日、ま、ま、菖、蒲、酒、と、の、こ、ま、ち、の、ま、ち、ま、
名、を、飲、後、と、り、と、團、書、同、信、志、お、い、李、船、四、序、隱、要、と、ん、り、民、月、今、よ、い、
い、日、菖、蒲、の、根、を、ま、ま、と、え、長、一、寸、小、切、て、酒、後、は、ま、と、飲、て、り、り、り、り、○
補、本、草、綱、目、曰、是、日、切、菖、蒲、漬、酒、飲、之、或、加、雄、黄、少、許、除、

一切悪

○菖蒲酏 食鑑曰五月五日用煮菰粽截去

首尾之菰莖乘温兩箇生菖蒲莖一握長一尺好古酒一

升好醋一升清水一升俱入甕中以蓋掩甕口而緊封之

置于温暖地最忌響動不淨經一月許候醋熟而用之補

○梟羹 郊祀志曰漢武令郡國每歲進梟五

月五日為羹賜百官以惡鳥故食之也○時珍本十日鴉

一名梟鴉一名流離經詩一名鴞鴞梟其聲也鴞其色如鴞

色也流離言其不祥梟長則食其母故古人夏至殊之而

其字從鳥首在木上山林取有之少美好而長醜惡狀如

母鷄有斑文頭如鴞鴞目如猫目其名自呼好食菜搥賣

誼所賦鴞是也其肉甚美可為羹臠炙食○た、か、お、お、の、り、ま、れ、を、と、れ、て、ま、り、苗、う、れ、り、ふ、ら、ぬ、あ、い、の、こ、ま、ち、の、ま、ち、ま、

梟狀似母雞頭背有黃黑斑文頭口喙短尖兩頰有黃白

園如相對其中有眼如猫目尾如鴟而短脰掌青白盛午
不見物夜則飛行食鳥鼠或入民家食鼠其鳴声初如呼
後如語山林所々有之若近人家有凶故為惡禽或曰食
父母又食人之爪此則古人之傳稱而未詳一種有鳩梟
者形躡曰而毛羽黃赤有紫斑稍美可愛海國多有之又
一種有白梟者松前蝦夷希有之形躡曰而毛羽白有紫
斑翎翹最美二梟俱近時作揚弓之箭羽以競美尔

○龜菹

○周外凡土記云江南五月五日煮肥
龜入塩豉蒜蓼食之名曰菹龜取陰内陽外之爻也 ○

○曹

○續日本紀曰光仁天皇室龜十一年五
月辛未以京庫及諸國甲六百領且送鎮狄將軍之所 ○
已卯 勅曰在賊乱常侵擾邊境烽燧多虞付候失守今

遣征東并鎮狄將軍分道征討 ○

或謂天
志元年
吳城退治

乃有將軍發向の時於延平甲曹と稱ふその日五月五日
於款之滅くて故都あつたりはとほせといて板御とて男を造り
てあふ今日立能はつてつて今事時難能云々は法王師と作り又と
蒜と春とてつてつてのきとらつてつてつて松原とつてつて
文集曰端午登府被或達官誘導入厨門處縱規候伯士
太夫所献木曹木長刀皆篆刻彩飾以尽華靡曹二百十
七八刃長刀六十柄許又揚白旗十五竿於石堞上詩曰
端午朝來微雨暗官橋車馬做群行文人帶得菖蒲劍結
構平城俛俱棚 ○

○懺

○拾言記云五月為男子祭節句嚴具

足甲曹旌纒鎗長大刀等武具者男子可出軍陳振舞武勇
領國郡為功故以出陳威勢之體為政故作菖蒲刀等打
合成軍陣休決其勝負是則五月陰氣逆陽冒地節故對

南投汨罗而死国人吊之故有此凡吳人皆效之亦有此
盛集以為小兒之節序登舟競渡皆懸符箓艾禳毒氣耳
亦闖龍舟之勝負或奪標而飲 此流俗之習也
其の節序は舟に登りて舟を競ひて其の勝つるを以て
亦闖龍舟之勝負或奪標而飲 此流俗之習也

万 上 哀

百濟城の古宮人去船並邑且川後舟競夕川後上哀 村中凡

○競逐 美日

○日本紀曰藥獵前委注之○荆楚記曰是

日競採雜藥夏少正云此日菑藥以止除毒毒氣○字後万上

抄曰五月五日舟競採藥也○是亦の流俗也人々日
采藥を以て競逐す此流俗也の流俗也の流俗也

万 上 哀

平郡乃山尔四月与五月之間尔業獵 上 哀

同 七

加吉郡携多衣尔須利都計麻須良雄乃服曾上攝須流月來 上 哀

夫亦 郭公何もしつとあやふ事つる事日此をうらり記す

○補良安曰唐人來寓居長崎逢此日則乘數艘小船立
旗幟而爭先喚曰排竜々々以速為勝也蓋為屈原吳逐
竜之意乎 此一系競逐の事也入との
流俗也

○艾と採

○荆楚記曰五月五日人皆蹋百草

採艾為人懸戸上以禳毒氣○又曰五月五日雞未鳴時
采艾似人形者攬而取之收以灸病甚驗

△艾人

○荆楚記曰瀕故師曠占云歲多病則艾草先

生 菅家艾草四日題芥人詩云有時當戸危身立無意
故園任脚行 ○抄曰五月五日采艾之時
もいふや九葉艾といふは五月五日の採艾の時也
今和歌に艾を採るは五月五日の採艾の時也

夫亦

園の内より草の枝を採りてまきあはる事代なる 神代

△艾虎

○風土記曰端午以艾為虎形或剪絲為虎粘

艾葉戴之

五月五日午時取艾葉之

△浴蘭湯

○楚辭云浴蘭湯兮沐芳華 ○和氣於菖蒲と云つて浴する

△啄木鳥賣

荆楚歲時記云野人以五月五日得啄木鳥貨之主 齒痛淮南子亦云劉木愈齩

△鴝鴒去舌

○陳藏器本中曰鴝鴒五月五日取雞剪去舌端即能效

○時珍本中曰鴝鴒好浴水其睛瞿瞿然故名身首具黑兩翼下各有白點其舌如人舌剪

剔能作人言 和云黑翳と云つて鸚鵡と云つて其舌を剪て人言

△守宮と搗

○武帝記曰午日取守宮飼以丹砂体畫赤次歲此日搗之塗宮人臂右犯則消故曰守宮

○此等小虫のとりとれとて搗き守宮と云つて其の砂を搗

補本朝食鑑曰蝮蝮狀似蜴蜥而小頭大於蜴蜥而扁

曰背青黑也腹赤四足極小每在草沢山池之中性淫能交故自古作房中術者取血以塗女身則如赤誌若有交

接事便脫蛻人稱蜴誌又歌書所謂用蜴血塗宮女之

臂待遇王之行則得竈故号守宮按今此二説以蜴字訓

伊毛利或作守宮是恐有誤矣守宮者蝮蝮每在屋壁間

故名也又古歌謂伊毛利須魚山下水乃秋乃色者無須

武手尔津久志苗志也計里然則蜴誌為蝮蝮凡蜴蜥蝮

蝮蝮自古相混歟

△蠅豆を搗

○太平廣記曰午日取蠅虎杵碎拌豆自踴躍可以擊蠅

△粉團角黍を射

○開元遺事曰宮中端午造粉團角黍射之中者得食清臈難射也都

市盛行此戲 ○堂々揚子の好く是れ射る海法なり

○早瓜供 五日

○延平式訓 善 曰五月五日山科園

進早瓜一捧若不實者獻花根○又曰山科園九段云管
早瓜一段種子四合五句惣草切四十六人耕地二通下
字半人貳拂虫十二人壅并芸三遍芽一遍五人三月芽
二遍四人三月第三遍三人四月○自中乃申秘抄曰因吉司供示

此夏元内恒遠當恒与仲子瓜山博園御園所供也而件御園共桓
我天皇所建治也云云恒与彼瓜氣也仍遠之帝位守延キ式
七ヶ幸隨一也
收拾難
なまゆふまき
あすぬのみりの瓜とさうまうまういあつとらとをあけき
る年を左

○賜時服 五日

服○杜子美端午日賜衣詩曰宮衣亦有名端午被恩榮
細葛含風軟香羅疊雪輕自天題處濕當暑着來清意內
稱長短終身荷聖情○室別葛衣して綿絡り給ふんり
和信も今より綿と云一八月海日一候云
今日時服を賜ふの儀傳は佳書の根元をい御衣を法了給りしとも
あまの各別の中り人一衣門の葛蒲綿とて賜ふの好書あまの傳り

○元亨尺書詩像 日感忘寺者
一演法師嘗持親世音像欲得勝地安之廣求冥區貞親
中到平安城東北鴨河西岸干時此地搖震紫雲降垂逆
花紛乱奇香薰郁演喜而構伽藍以故号感忘寺一日老
翁持釣竿出河中語演曰我此地之生也自今忘為護伽
藍神我有神力能除障去疫疠又結好夫婦調適產育
取謂午頭天王者也我好眠一歲三百六十日只五月五
日醒餘日皆卧端午之朝初起向天吐氣其氣或為雲霞

△賜扇 五日

宗謂長孫無忌揚師道曰五日舊俗必用服玩相賀今朕
各遺卿飛帛扇二枚庶動清風以增養德推舊俗之語則
知端午之以扇相遺自唐太宗始也○和歌よおそ今日扇と
賜ふ事一書夏旬より扇は扇とわら給ふの儀は
源氏物語

○午頭天全醒賦 五日

日感忘寺者
一演法師嘗持親世音像欲得勝地安之廣求冥區貞親
中到平安城東北鴨河西岸干時此地搖震紫雲降垂逆
花紛乱奇香薰郁演喜而構伽藍以故号感忘寺一日老
翁持釣竿出河中語演曰我此地之生也自今忘為護伽
藍神我有神力能除障去疫疠又結好夫婦調適產育
取謂午頭天王者也我好眠一歲三百六十日只五月五
日醒餘日皆卧端午之朝初起向天吐氣其氣或為雲霞

かり持書美をよみしゆはる一云内の事のあらり

或為雨露霜萬不同其取解或為藥或為毒或為惡瘡或為疾疫皆是有情之業感也非我強為也言已形隱演錄神言奏朝敷黃門侍郎藤長良就其地七日夜行道念誦以報神德○此記云或人云一馬之神信云其馬也日行千里其馬皆神也此通乎此而云尚也其狀乃事有也其今日眠と解_孫也信也其馬也其神也其馬也其神也

○聖馬競馬五日

詞林采葉曰或記云伊呂波字類抄曰本

朝事祭祠日乘馬者志貴嶋宮欽明天皇之御世天下奉國凡吹雨零尔時勅下部伊吉若日子令下乃卜奏賀茂神崇也仍撰四月吉日馬繫於人蒙猪影而駟馳以為祭祀能令禱祀因之五穀成就天下豐年也乘馬始於此也○注進略記曰五月五日競馬人王七十三代堀川院寛治七年為五穀成就天下安全御祝禱始被寄十番廿足

馬料例年被令行○詞林采葉云其馬也其神也其馬也其神也馬料例年被令行○詞林采葉云其馬也其神也其馬也其神也馬料例年被令行○詞林采葉云其馬也其神也其馬也其神也

○舊事紀五

神社啓蒙曰藤森社在山城國紀伊郡深草山之南所祭之神一座舍人親王天武皇子 廢帝父

史書集 五月奉聖馬の向ふのあま系り云云云云

統日本紀曰元正天皇養老四年先是一品舍人親王奉
 勅修日本紀至是功成奏上紀世卷系口一卷 又云廢
 帝天平字三年六月追尊舍人親王稱崇道天皇敬皇帝
 ○又云後云此種を敷き或は之を傳すの種傳りしに
 とりて後云此種は之を傳すの種傳りしに
 又云云前今人教之申 早良親王 天孫神傳天皇種德慶皇
 皇德之元天皇天皇天皇 皇德天皇此の賦吾等より
 祈して此種は之を傳すの種傳りしに
 又云云前今人教之申 早良親王 天孫神傳天皇種德慶皇
 皇德之元天皇天皇天皇 皇德天皇此の賦吾等より
 祈して此種は之を傳すの種傳りしに
 又云云前今人教之申 早良親王 天孫神傳天皇種德慶皇
 皇德之元天皇天皇天皇 皇德天皇此の賦吾等より
 祈して此種は之を傳すの種傳りしに

海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに
 海東養老の地 平河府の種傳りしに

○元亨尺書 神仙 曰新羅明神者

天安二年日珍師泛舶自唐歸洋中忽有老翁現船舷曰
 我是新羅國之神也誓護持師教法至慈氏下生語已不
 見珍入京將傳來教籍藏尚書省時海上翁來曰此取不
 堪置經書是日域中有一勝地我已先相做師闡宮建院
 宇度此典籍我鎮加護又仏法是王法之治具也語已形
 隱珍飯瘠山至山王院壯山王明神現形曰傳來經書宜
 藏此取新羅明神又出曰此地來世必有喧爭不可置也

南行數里是為勝處珍乃與新羅山王二神及二比丘到
 滋賀郡口城寺寺僧教待說寺夏既而山王迴睿阜新羅
 明神語珍曰我卜居寺之北野取百千眷屬條來口統唯
 珍獨見他人不知於是右乘輿人後衛甚多以羨饒饗新
 羅教待來賀而後乘輿人形隱不見珍問明神執轡者為
 誰新羅曰三尾明神也祠今在寺南自是新羅明神威灵益顯
 ○神社考曰日本紀曰素戔嗚尊帥其子五十猛神降到
 於新羅國居曾尸茂梨之處乃興言曰此地吾不欲居遂
 以埴土作舟乘之東渡到出雲口皸川上所在島上峯
 ○尺書咄曰尺明尊寬德二年為三井寺長吏永承三年
 任天台座主七年九月始行新羅祭祠神託和歌驩納
 ○高代新宮新羅三井寺の銘あり社考云云新羅の作云々
 之好今也云々新羅祭祠今也五月五日之祭也

○祭屈原五日

姓也為楚懷王左徒入則與王口譏國事以出號令出則
 接遇賓客應對諸侯王甚任之上官大夫譏之屈平作離
 騷既紕其後懷王竟死於春長子頃襄王立以其弟子蘭
 為令尹率使上言大夫短屈原於頃襄王王怒而遷之屈
 原至江濱行吟汨畔顏色憔悴形容枯槁得渙於是懷石
 逐自投汨羅以死後百有餘年漢有賈生為長沙王太傅
 過湘水投書以吊屈原取文○統齊諧記云屈原以五月
 五日投汨羅而死楚人哀之每於此日以筒貯米投水祭
 之漢建武中長沙王回白日忽見一人自称三閭大夫謂
 回白聞君常見祭甚善但常年所遺為蛟鼉所竊今若有
 惠當以楝樹葉塞上以五色絲轉縛之此物蛟鼉所憚回
 依其言世人五月五日作糉并帶五色絲及楝葉皆汨羅
 之遺風○今之屈原云々糉之會云々

子每其字て海をわたり時暴風係處て浪をたつとて水神を感て帝
少人をやまされわりのみとて其意をこころ移して海中より入るべきを
乃被託とてうきりりて海神人となりて馬に出入り舟も其御あり
とてつらつらとていふ原の洞窟に之の魚腹に葬とてとあり時の
信物ありとてや 神の由りて是の通待儀なりとて用也

○赤灵符

○抱朴子曰或問辟五兵之道曰五
月五日箸赤灵符於心前今叙頭符是也○
多とていふ事要雄のそと種氏おまのそと一少間書て是と衣袂付
しと告げの社符とて信事よめて種氏おまのそと行のれり

○竹中神水

○時珍本中曰方書曰重五日午時
有雨則急破二竹竿竹節中必有神水瀝取攪肝為丸治
心腹積聚 和以酒とて用る

○五月鏡

○異聞集曰天空中揚州進水心鏡
背有盤竜五月五日於揚子江心鑄之背竜頗異後大旱

祠之乃雨○千室搜神記云金錫之性一也五月丙午日
午時鑄為陽燧十一月壬子日子時鑄為陰燧○時珍本
草曰五月鏡高堂陸云陽燧一名陽符取火於日陰燧一
名陰符取水於月並以銅作之謂之水火之鏡○是火と
日月より取て鏡に以て鏡を鑄日燭午丙午此と鏡上と此と
此事和事鑄用と法法とて古人乃鑄あり

史中集 五月五日 五月五日 五月五日 五月五日 五月五日

○右近衛の儀

○延喜式

馬并騎射式右當日早朝鞍細馬十匹車駕幸武德殿蚤
時寮頭以御馬名簿進於御監則奏寮官率近衛十人各
騎細馬即以次度度畢頭已下從殿前至於馬出埒下左
右近衛中少將與寮頭助共令競走左右寮允各一人立
馬出埒左右側奏馬名詞云某牧若干某毛御馬若干有
臣下貢者同上條内豎傳奏左右近衛將監左右馬寮允

属各一人率馬醫就馬留標下注勝負丈尺競走畢還寮
 近衛兵衛官人率舍人等到來裝束而騎調馬陳列向射
 場騎射訖諸衛更亦騎御馬供奉雜戲○同内近日凡五
 月六日毬子廿九盛揚預造備騎射畢即當武德殿南階
 西邊允已上一人率番上一人持候隨殿上喚進之同
 左右日凡五月六日騎射官人近衛惣十人六人六寸的
 並著深緑布衫錦甲形白布帶横刀弓箭行騰麻鞋其交
 名當府判官立殿前奏之訖供雜戲○同左右騎射官人
 兵衛惣六人五人六寸的○志子流の説と池と内近より
 新云 六日 いまじんらあつちたわあつといふまゝさきあつちらう
 ○仇池墨記云種竹須用辰日裁用
 臘月非此時移之多不活五月十三日古人謂之竹醉日
 又謂之竹迷日裁竹多盛茂或陰雨則鞭行明年笋莖交
 出○和信も皆と用又竹迷日とて笋と採合するの竹書もいふ

○補五雜組曰捲栽竹無時雨遇便移須留宿根記取南
 技此妙訣也倍説五月十三日為竹醉日不特此也正月
 一日二月二日三月三日直至十二月十二日皆可栽大
 要掘土欲廣不傷其根多欲栽稍使風不搖雨後移之土
 湿易活無不成者而暑月尤宜蓋土膏潤而雨沢多也

○室の林の事 十二日
 ○先代旧事紀曰針間国室戸神
 社浮穴宮天皇時味鉦高彦根大神出現鎮座已上七十七
紀七十日山代国高鴨上宮味鉦高彦根大神無他言○是播初室津多社
 乃從とんまの初の室津一神のり多の高月と百人をさるは所の
 於也風流りともりあきし於國人召の

○今宮祭十五日
 ○諸神記曰正暦五年一条院六月
 廿七日被安置疫神於船岡山長保三年五月九日被遷
 坐疫神於紫野京師卑庶行御靈會被遷此所依冥夢之

告也○又云神殿三字瑞垣等木工寮修理職所造備也
 又御輿内匠寮造之○公事根源云世傳今云此乃應為の作
 けり云唐の也其儀云王上より時比神社より各在る也
 能二之を修せざるもや可成或人の云世の中より一付を以て其儀の小
 人云よりし社を修て其儀も社を修する人云修りり○南世の
 十二日此より其儀を修し四例ありて其儀より其儀を修して其儀
 乃資料と云其儀の社儀洗と号して二股川に架て其儀を修して
 好長の杭好焼毛と持て五月七日より其儀を修して其儀を修して
 大里の空れば社儀三基の内住者云門乃社儀振の其儀を社儀の上令
 風の響下延唐四月九日其儀の名を彫之儀雍州府志云此儀十八日又此
 丁社儀を洗ふ云海より其儀を修して其儀を修して其儀を修して其儀を修して
 幣とて社神と云好焼毛と号して其儀を修して其儀を修して其儀を修して其儀を修して
 乃儀 白州の儀と云其儀を修して其儀を修して其儀を修して其儀を修して
 日 今より其儀を修して其儀を修して其儀を修して其儀を修して

○宇治系 十五日

○日本紀仁德紀

曰菟道稚郎子興宮

室於菟道而居之由讓位於大鷦鷯尊以久不即皇位爰
 皇位空之既經三載取有海人賞鮮魚之苞苴獻于菟道
 宮也太子命海人曰我非天皇乃返之令進難波大鷦鷯
 尊亦返之以令獻菟道於是海人之苞苴鮮於往還更返
 之取他鮮魚而獻焉讓如前日鮮魚亦餒海人苦於屢還
 乃棄鮮魚而哭故諺曰有海人耶咽已物以泣其是之緣
 也太子曰我知不可奪兄王之志豈久生之煩天下平乃
 自死焉取大鷦鷯尊聞太子薨以驚之從難波馳之到菟
 道宮爰太子薨之經三日時大鷦鷯尊擗叫哭不知所
 知乃解髮跨尻以三呼曰我第皇子乃應時而治讓皇位
 又問答
 甚恻乃葬於菟道山上○神社啓蒙曰宇治離宮在山城
 國宇治郡宇治里所祭之神一座藤原忠文按忠文者号

宇治民部卿母息長氏之女也兼平三年秀卿貞盛等以
 將門誅伐之功被行恩賞之日小野宮左府以忠文不入
 賞列也故忠文深恨小野宮左府而遂没于宇治川其靈
 數為祟百姓斃爽是以祭号宇治離宮○雍州府志曰傳
 言所祭藤原忠文也然謬傳乎次下記日本紀曰雅又云
 祭日奉金銀幣供奉人誤有金銀幣謂義年賀利々々○
 此社の社傳も後より識之由り下向せ又乎命り乎社次元不四本と
 昔々好人の若れ本より金を祀ししと云と捧て元今命り又湯を人りとは
 や信信を母神の若徳を奉り其乃其を人り人信り則に後より馬陰を量其表
 示して社をいひをらりり石を奉り後之に金銀幣を奉りてをらりりし
 此の最昔におつたにけり延喜の中歳有流殿乃御他界よりおつたに十
 八日社もはあ後公方家社を重宝高地よりいりて是と云教書にこれの
 所兼通するに信系おつては聖札を祈るに實に日限る所は其を
 六月廿六日定まらるるにけり人少のわらう又或は云高社を文の具社
 とす所の菟道稚郎子といふ名をとり社をいひたり

とす所の菟道稚郎子といふ名をとり社をいひたり

○平野長武式廿五

乃能地也其子唐母の此家後七家老の赤孫今世に平野傳とて傳り毎
 年五月廿五日は家門の者七家老の長武式として大食はり別向平王合
 城寺宮の八田村丸の女意心比丘尼乃建三宮内唐野跡乃住此旧
 跡あり傳り長武式は寺をいひ中承の村人今未傳あり

○有無日廿五日

帝王畧圖曰六十二代村上天皇
 諱成明醍醐帝弟十四子也朱雀同母弟也天慶九年四
 月二十八日即位在位二十一年康保四年五月廿五日
 崩六月四日葬村上山陵春秋四十二○公事根原云是村
 上て皇代御由をいひる事ありて甲とや乙と唐野跡乃住此旧
 跡あり傳り長武式は寺をいひ中承の村人今未傳あり

田と作らるり

○山田御田植 廿八日 ○是は伊勢山田御田植也此御田植より南代

日限も極るはち方二月廿八日其日の法吉りを推し延座敷を子良形なり
及人等を初いさるる金山俗云天乃其集麻をを侍とていらく田代作らるり
神田より多作乃及人等して子良早苗を植ゆのいさるる神代初と初い
それより古作美一乃多作すく神樂神といひ留神を舞ていらく早苗に糸
串を引神宮に坐馬なり子良の種樹を道へ出さるる金山の事とて是れ
へ初る白髪の人を金糸袍の肩と禱をあきて大座敷此大大持を所をて
お振足柄の男女を戴しひらきといひ丹ある神といひ此座敷を御田植を
小座敷より字良骨七か初作あり也種麻のありしは物なり是と法作なり
他由も出さるる又月をいひ此のいひ作のいひ今能く御書なり
凡雅集 夕月守山向の糸と尺屋と柄の末後よりなりぬるり おん
○佐長御田植 廿八日 ○是は播磨佐長の神の御田植を植ゆ神といひ

南代より南泉別場乳とる別として南代に女向傳は二座敷内り
於女を出て早乙女と云ふは是種もあつて凡流とては神田に社家のあり
みわり多し神代の人を奉りて神といはるるおし女は神田といはるる早苗を
いひ苗を植ゆ候式とてなり神幕より田植座敷といはるるおし女よりあり
神昔に於てもいへ博津津波海の邊を水乃宮あり此座敷に坐偶なり
その座敷後形乃神還恙なり人事といは神代行の形は志願の女田といひ
くろより恒例より伝へり人又今日神宮に坐神軍といはるる早苗は
を平て双方におもひさるる軍陣乃伝はり一園とあり神代を早
いらく神事や懺り権樂なり一と童四乃戯なり

○大原詣 廿八日 ○神社啓蒙曰大原神宮在丹波国
桑田郡所祭之神一座今座為伊弉並尊 ○社家説曰當宮
者伊勢大神宮母神伊弉並尊之鎮座也今以伊弉諾天
照大神為三座春秋兩度祭奠者遠近國郡為群也其祭

儀不事饗醴以染糝為禮而爾謙道於天下者乎○世傳
古事云少志と云は日御孫(諸て)祭儀にあつと(又)秋九月廿日(も)
祭儀仍りて諸てゆと社志(り)と(る)初とて(定)り好ま(ふ)系(統)と
云て(多)許(因)す(は)祭(ふ)醴(と)釀(て)社(も)傳(入)る(は)男(女)も(こ)つと
登(り)六(店)屋(も)是(と)も(依)り(其)酒(も)も(り)は(社)事(と)

富士垢離

○富士垢離 毎月六月朔より既入(り)と
ゆ(り)も(り)水(は)清(く)入(り)入(り)一(七)日(或)は(二)七(六)七(り)あ(り)の(お)も(ろ)屋(小)
こ(り)り(ゆ)り(り)も(り)活(か)の(川)も(り)あ(り)屋(と)川(も)り(り)竿(に)勢(を)付
て(三)本(杉)屋(と)して(行)ゆ(る)も(り)一(に)は(三)と(梵)天(と)は(は)屋(の)あ(り)一(に)宿(定)
の(定)ま(り)て(聖)徳(宗)の(三)室(院)の(講)先(を)ゆ(り)何(り)屋(を)之(を)あ(り)ゆ(り)け
屋(あ)る(り)少(時)く(水)ひ(り)て(身)と(屋)の(經)緯(理)也(と)も(り)初(日)日(初)
向(り)て(後)件(の)あ(り)を(諸)日(を)寫(す)も(り)や(り)も(り)そ(か)竹(の)時(活)水(と)も(り)宿
古(垢)離(と)り(り)

宍勝講撰吉日

元亨尺書

資治曰永延皇帝

院寬弘六年六月十九日名徳宮中講論宍勝王經五日
立為式先代或行或止自今為例○同篇曰釈源泉播州
人也長久四年後朱為宍勝講師至四天王品四王現形
唯帝獨見餘不看爾來宍勝講場設四天座救為永式
江家次第曰最勝講裏書曰寬弘六年以來被行也後來
儲四天座講五ヶ日兼日有増時尅公卿等参入
名定等於登御座被定之無陣儀也次上卿依仰仰殿上辨令打鍾次出居次將等次公卿参
上着座次威儀師率僧参上次講讀師着礼盤次唄散
華次行道證義者僧綱講師凡僧講師聽率等次第行道
畢着本座次近衛次將一人就講師高座東边仰御願趣
次講師表白次神分誦心次御祈願唱室次勸請此間威
儀師就御經札下用管分經二卷次講師釈經畢次論義
一座聽衆表白後論義二帖並二重次六種次廻向次咒

よみと薩をちるよの住運花やうとてつるく洋解をそなる書取
莊嚴を御聖心目一甲り洋解をそなる七日此書及び六月十八日
乃神楽洗すべし

○任者御

○けき振別任者の色より出り初と坊より
主事より上人御赤赤とて思ひ言ふとおま法の書をもとて
金のおけい極中此高深の節をとりて四つを後一人書取の志を極
の金と持金の法を立縁より高の節をとり細竹のふすなり
を持て金金の柄をたて書取を愛とおまのる者園扇をたて書取
けき同よりいひ初を古風よりて千留分任者の居の形極
よみと書取より早業とていひ初を止るく初極を任者高深の少初
尾よりいひ初をとり書取をとりたての人の任者御同極の目録り
清書の同の形極をとり早業とて初極の極をとりていひ初をとり
同極をとりとて

脱條

○分竜節 廿九日

分竜節雨則多大水也 ○五雜組卷日倍有立夏分竜之
説蓋竜於此時始分界而行雨各有區域不能相渝故有
咫尺之間而晴雨頓殊者竜為之也

○祇園舎書符入 廿日

○おまの居の雜色極を社勢 密書院
執事所 の
坊より例の通社より極の中へ入る執事の取書札帳を
おまの居より及一献りて新文退此後よりいひ初と出た所
より例の通社より極の中へ入る執事の取書札帳を
切大入より中より社役の取書札帳をとりて

○菖蒲枕

○東鑑卷三十二嘉禎四年五月四
日戌寅曉陰及晚自將軍家被調進菖蒲御枕 鑄金銀并

